
光るレーン

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光るレーン

【Nコード】

N3655P

【作者名】

空

【あらすじ】

走るのって楽しい・・・

高校に入って体育の授業で走った50m走

だが楽しさを覚えたと同時に

幼なじみの桐生昴の速さに萎えてしまう・・・

陸上部に入り成長していく姿を描いたはなしです。

始まり

3月24日。ある高校入試の合格発表が行われてた。

「もう発表してるし・・・」一人の少年が傘をさし小走りでそれが行われている場所へ向かっていった。

「はやく見について帰ろう・・・寒いし

1017 1017・・・あぁやっぱりあるわ！よっしゃぁ帰ろう」

少年は自分の番号を見つけると、自分がこれから3年間通う高校を少し見てまた小走りで去っていった。

兵庫県立三木工業高等学校一年生 岸上直希。

4月2日入学式が終わった次の日だった。

「よお直希めっちゃ眠いわ」と昴スバルが後ろから走ってきた

「家近いだろ・・・お前」

「だからだよ チャリ通できないんだよ」と中学・・・いや小学・・・保育園の時から

こんな風にこいつと話してる気がする。

キリュウスバル 桐生昴家が近くですって昔からの付き合いで幼なじみ

「てかこの制服やっぱ他の高校とは違うよな、ほぼスーツだぜ」

「学ランよりはかっこいいかな」とそんな話をしながらグラウンドの前を

通りかかると、運動部の掛け声が響いてくる。

「なぁ昴お前部活入んねえの？」

「ん・・・？」と昴は黙りきってしまった。

昴は中学のときに陸上で、400mで全国大会までいき全中4位とかいう

すげえ成績を残してる。もっとも中学の時の昴は運動部に入っていない
なくて

陸上部の連中や顧問の先生にほぼ強制的に大会に出させられたらしい。
昴はマジで嫌がってたが・・・それで全国までいくとか・・・すげえ
わコイツ

「逆に聞くけど直希は？50mクロール兵庫県チャンピオンさま
はこの部活に入るんだよ？」

と昴はバカにしたような口調で聞いてくる。

一応俺は、水泳をやっている兵庫県チャンピオンになった・・・だ
がもう水泳はするきはない

「水泳が速くても陸上とは関係ねえし」

「なんで陸上っていう前提で答えるし・・・てか400mはお前も
速いだろ・・・絶対

お前俺と50m0.03秒差だろ？絶対400mはえーわ・・・」

「スタミナねえし・・・」

「水泳で鍛えてるだろ！しかもお前、有井から接地の才能があると
かなんとか褒められてたじゃん」

（有井とは俺たちの中学で陸上部の顧問している先生）

「接地だけじゃね・・・」

2組の昴と廊下で別れて一組に入った。

やっぱり工業高校だけあって男子が多い、けどまだここは一群（
建築科・デザイン科・総合理化学科・都市環境工学科）なので女子
もいる！席に付いてばーっとしてると

ある男子が、「なあ、桐生昴と知り合いなん？」と聞いてきた。

「うん。幼なじみ」

「へー！あ！俺、澤田光弥さわだみつやよろしく」

「俺は岸上直希！よろしく！！昴知ってるって事は陸上やってたの
？」

「うん！400mやってた！桐生君速いね・・・人間じゃねえわ」

「あいつの速さはチートすぎるからな」
「桐生君陸上部入るって？」
「いや・・・入らないと思う・・・」
「マジかよ・・・全中4位だぜ！もったいねえ・・・」
「昔からしんどののが嫌いな奴なんだよ」
「へー・・・岸上君は？どっかはいんの？」
「たぶん入らないよ、まだ決めてないけど」
「あんま速そうに見えないもん」（笑）
「てめえ！初対面だぞ（笑）」
「悪い悪い！まあ今日体育あるし速くないかわかるよ」

始まり（後書き）

文章が荒いですね。

一気に書ききったため誤字脱字が多いと思いますが
暖かく見守ってください。

50m走

4時間目の体育の時間

俺はテツキリ集団行動とか、基本的な事をすると思ってたけど。

まさかいきなり、スポーツテストの50m走とか・・・

「岸上君？だっけ」と後ろから

「ん？そうだけど何？」

「2組の桐生っていうやつすげえ速いってマジ？」

「あああの人間チート？人間じゃないよ（笑）」

「マジか！まあ勝つし！！」

「勝てんの？」

「まあ少なくとも岸上君よりは速いよ」

「ふーん（すげえ自信だな、てか中学の時ならこの時点で俺切れてるな（笑）」

「岸上」と澤田が呼ぶ

「なに？」

「全中4位のお出ましたよ（笑）ほらあそこ」とグラウンドから降りてくる

昴を差す澤田。

「おー直希ー、いきなり50mかよ！（笑）」

「ほんまなーまあやりますか！」

体操して先生の簡単な自己紹介が終わると、一人の先生が

「じゃあ早速50m走していききたいと思いますが、不得意だという人もいるかも

しれませんがまあ頑張ってはしってください」といった。

自己紹介をしなかった先生だ・・・誰だ？

「自己紹介をしてなかったなー、先生は柴阪と言います陸上部の顧問をしています。よろしく」

といった瞬間下がっていた、俺の頭がすばやく起き上がった。

（あれが・・・陸上部の顧問・・・すげえ怖そうだな！おい！（苦笑））

坊主でジャージを着ている柴阪という陸上部顧問、身長が高く175cmはあるか・・・？

ハードルでもやってたのかな？

とか考えてるうちに50mの走る班分けが行われてた。班分けといつても女子と男子に別れるだけだ、

最初に女子が走るがその前に、あの柴阪とかいう先生が簡単なフォームを教えている。

すげえ分かりやすい・・・さすがだ。フォーム説明を聞いてるうちに中学のときに有井先生（中学の時の陸上部の顧問）に教えてもらったフォームの説明が頭を過ぎる

50m走？

「・・・てな感じで走ったらいいタイムがでるよ」と柴阪先生の説明が終わった。

隣に並んでる昴を見てみると、目が本気モードになってた・・・なんだかんだいってこいつ走るの好きなんじゃないかね？と思う

そりゃ純粹に走るのが楽しいっていうやつはイッパイいるだろう。だけどこいつの楽しいは何かが違う・・・50mってというのは男子からいえば

結構重要な勝負所だ。女子にもアピールできるし大抵足が速いやつはモテルし・・・

そういう理由で燃える奴もいるだろ、だが昴は違う・・・こいつはどういう楽しいで走るんだろ・・・と考えてたら、柴阪先生が「ここにはな、中学で400m全国4位になったやつがいるもし口だけの説明だけで分らなかつたらそいつを見てみる、参考になるぞ。」と言った

その瞬間あたりがざわめいた、そりゃ全国4位だもんな・・・昴の方をチラッと見てみると

まるで他人事の用にボーっとしてる。昴らしいわ(笑)

「じゃあ始めようか！」と柴阪先生が声を掛ける

「一組の出席番号一番の女子と二組の出席番号一番の女子！並んで」と他の先生が言う。

こんだけ人数がいれば時間がかかる男子は暇だ・・・クラスの男子は新しい友達作りや、誰が可愛いかなどを話して盛り上がってる。

そついや可愛い子いるかなー？と俺も探していると、後ろから

「今に列目にいる子は？どう？」と昴が聞いてくる。「どれどれ？」と探す

「大人っぽいな(笑)直希の好きなタイプじゃね？」「ちょい怖いな(笑)」そんな話しをしてると

その子はもうゴールしていた。『はやっ!』と昴と俺は声を出した。
他の男子も

「あいつハヤっ!何秒?」「俺より早いんじゃない?」「苦笑」「そんな声が上がってた。」

「あいつ直希と一緒のクラスじゃん(笑)」「と昴がにやけて言う」「まじかよー!(笑)やったね!」と俺は素直に言ってしまった。

50m走？

「そついや、なんか俺のクラスにお前に50m勝つ！とか言つてたやつがいたよ」とまだニヤけてる昴に

言った。「ヘーマジかよ・・・誰？」「忘れた」「すげー記憶力だな！オイ（笑）」

「まあ勝つだろ？」「たぶん・・・俺が負けるとすれば一人ぐらいしかここにはいねえし」と俺の方を見て言う昴「マジかよ・・・俺負けるぜ・・・」「0,03秒差だったじゃん！」「昴はすこし強く言った。「いつの話だよ・・・お前その後全中4位だろ！負けよ」「んなわけなねえよ楽しみだよ」と昴はガチな目で俺見た。全中4位だぜすげえ速いんだろな・・・でも何故か嬉しかった！全中4位という化け物が俺とガチで走ろうとしてる！と思つたら身体が急にうずいてきた！

「次！男子いくぞー出席番号が若い順から！」と先生が声を掛ける。イチニツイテ・・・ヨイ・・・ドンツ！！という声が聞こえてくる。やつぱ男子だ、女子と比べると速い。

しばらく見ていると・・・「スバルうーあいつだ・・・お前に勝つてゆつてたやつ」

「ふーん・・・速いのかねー」イチニツイテ・・・ヨイ ドンツ！！そいつはスタートダッシュが違った・・・「はえー」不意に呟いてしまった。昴は「ヘー」と言つたきり黙り込んだ。

こいつ目が本気だ。また身体がうずいてきた。そいつがゴールしたときゴール側にいた女子の声が聞こえてくる。相当なタイムだろう。すると一人の男子がタイムが聞こえたのか「6秒1！」と大声で言った。すると男子の集団からは『オオー』という声が漏れた「格が違うな・・・」「あいつ鬼だわ」

昴は「おもしれえ・・・」と目が輝いていた。「直希！こんなにワクワクするのは久しぶりだよ」と俺に輝いている目で言ってきた。「

俺も身体が震えてるよ（笑）体育の50m走で！（笑）」と昴に言う。

そんな会話をしていると、ついに順番が回ってきた・・・隣は・・・やっぱりな・・・絶対そうだと思っただけどよ・・・昴だ。まだ男子は6秒1をだした奴の話で、ざわついていた。「うるせえな・・・」と俺は感じた。昴も感じているのだろう舌打ちが聞こえてきた。するとある声が響いた。

『うるせえよ!!』澤田の声だ『お前からこの勝負見ているよ、6秒1なんて遅く感じるぜ』と澤田は表情を変えずに腕組をしながら俺たちを見ていた。男子の集団が「なんだよそんなに速いの？こいつら？」「こいつらのどっちかが全中4位のやつじゃねえの？」と男子がざわめく。

すると先生が「静かにしろ！尺がないんだよ！」と怒鳴った。辺りはシンとなり怒鳴り声が女子の方にも聞こえたのか女子の方も静かになった。集中できそうだ・・・昴はもう自分の世界に入っている。俺はゴールを見た。あそこまで昴と勝負！全中4位の男と・・・

「じゃあいくぞー」と先生が言う。

順位

いまだに身体が震えてる。体育の50m走で身体が震えてる。いつか50m走を昴と走った時、こんな震えは無かった。いやその前になんの意識もしてなかった。

でも今は、震えてる。隣に昴がいるから。

昴は、何か物凄いオーラーを出している。なんだろこのオーラーは・・・きつと格好良く言うと、

全中4位の強者のオーラー覇者のオーラーが出ている。そのオーラーを周りにいる男子、そして少し離れた所にいる女子の集団も感じているのだろうか、本当にシンとしている。

・・・風が吹いてる・・・こういうのを追い風っていうのか・・・

イチニツイテ！！ クラウチングスタートの準備をする。ヨイイ・・・尻を上げる・・・ドンツ！！

昴より速くスタートダッシュをした！そしてゴールを見るゴールを見て走る！

昴が追いついてくる！並ぶ！抜かれる！抜かせない！！だが昴の肩が前にある・・・くそ！

追い付けない！！もうすぐで・・・ゴール・・・

ゴールした。こんなに疲れたのは初めてだ・・・50m走ってこんなにキツイっけ？・・・

女子の集団からはざわめき、歓声の音が漏れている。男子の方からもそんな声が聞こえる・・・

昴は体育座りして頭を下げていた。タイム計測をしていた先生はストップウォッチ見て固まっているように見えた。俺も昴もタイムが言われるのを待っていた。周りにいた人もそれを待っていた。

「一位・・・5秒5,9・・・二位・・・5秒6,0・・・」周り

にいた女子からは『オオオオ』という声、男子からは『人間じゃねえ……』、先生達はみんな苦笑いをしている。

「やつはお前だけだわ……俺と勝負できるの」「さすが……全中4位だな……」

「さすだな！桐生！400m全国4位それにお前も……岸上、お前全中4位についていったぞ。お前陸上経験は？」「ないです……」「ほんまか！？？すごいな……才能があるぜお前ら……」とそう言いながら立ち去った陸上部顧問の柴阪先生

「岸上？」と体育が始まる前昴に勝つと聞いてたやつが俺の名前を呼んだ

「お前……速いな……すげえわ、まさかお前に負けるなんて」「性格からお前は負けてるよ、それに接地が素人なんだよ、お前はただ足で走ってるだけだよ」と昴が

すこし怒った顔でそいつに言葉を発した。「氣い悪つ……」「とそいつは離れていった。

その後澤田の50m走を見るのを昴は付き合ってくれた。

「あいつが澤田だよ、中学では400m走ってたそうだよ」「ふーん」と昴は興味なさそうに澤田を見た

澤田がスタートした。やはり澤田もスタートが違った。どんどん隣のやつと差が開くそしてゴール。

「一位……6秒ジャスト！二位……」また歓声が上がった。ゴールした澤田を見て昴が、

「澤田……澤田光弥！あいつか！！」「知ってんのかよ！」「あ……県大会の決勝で走った。一人だけ最後まで付いてくる奴がいてよ、そいつが澤田光弥だよ！思い出した！」「すげえじゃん……あいつ」

澤田がこっちにやって来た「よう5秒台の諸君！（笑）やつは桐生君速いな……てかやつぱり岸上も速かったか（苦笑）」「やつぱりって？なんで俺が速いと？」「お前……桐生と並んでる時す

げえオーラーだしてたんだよ（笑）勿論桐生もすげえオーラー出してたけど、桐生のオーラーに負けて無かったんだよ」「マジかよ・・・」

「へえ・・・澤田君凄いいね本物のスプリントだわ通りである時は苦戦したハズだ」と真剣な顔で言う昴

「おお！覚えててくれたんだ！すげえ嬉しいわ！」「あんなに粘られたのは初めてだからな」

と二人とも会話が弾んでいる。

「って！！お前ら二人とも陸上部入るのか？！」と澤田は俺と昴に聞いてきた。

「俺はいいよ！入る！」と昴が軽く言った。マジかよ・・・「おお流石！全中4位！で！岸上は？」

「俺は・・・大体俺もし陸上部入ったとしてなんの種目に・・・」

「400だろっ！！」と澤田と昴は口を揃えて言った。「お前ら・・・それは自分の種目だからだろうが！」「いやお前は400だよ岸上お前50mの後半、桐生に付いて行ってたたる！桐生に後半付いて行ける奴なんてそういねえよ！」

「それにお前はスタミナとか有酸素とか俺より遙かに上だろうが！クロール50m兵庫県チャンピオン！（笑）」「ええ！マジかよそれ？お前入れ！」・・・「ああ！入るよ陸上部！」

陸上部

三木工業高等学校の陸上部は総勢16人というかなりの少数精鋭だ。だがその中でかなりの成績を残しており、三木工の100何年ある伝統の中で全国大会までは行かないが、近畿大会までは何度も出場しておりその中でも優秀な成績を残しているらしい・・・すげえじやん・・・

また三木工の運動部の中で最も厳しいと言われてるらしい。やべえ・・・

俺と昴、澤田は放課後、陸上部の顧問である柴阪先生がいる体育科職員室（教官室）へ入部の挨拶へと向かった。

「おお、お前から陸上部に入るのか？じゃあこの入部届けを書け」と柴阪先生は俺達3人に入部届けを渡し、「今年もいいのが入ったな！」と喜んだように俺たちを見て言った。（今年も・・・？）

俺たちが入部届けの記入の説明を聞いていると、後ろから扉をノックする音が聞こえてきた。

「失礼します。陸上部3年の林です。柴阪先生に用があつて来ました。失礼します」と丁寧に耳に心地よい声で入室の挨拶をした、一人の背の高い人が立っていた。

「おお林！丁度よかった。こいつら今年の新入部員」と俺たちを指差した。俺達は頭を下げた。

「あ はい」「こいつら部室まで連れて行ってくれ」「はい練習メニューは？メニュー版に書いてませんか・・・」

「ああ今日もフリー 先生も後で行く」「分かりました」と言い俺達を連れて教官室を出た。「あ 俺キャプテンの林な よろしく」

『岸上です・澤田です・桐生です』

「お前から全員短距離？」と3人を見ながら林キャプテンが聞いてきた。「ハイ3人もです」と澤田が言った。「俺も短距離だからよ

ろしくな！」『ハイ！』 林キャプテンの印象は・・・かなりのイケメンだ。スットした顔立ちで眉毛がキリツとしてる。それに脚がかなり長い・・・きつとモデルんだろうな！。

部室前につくと、制服を着た人が溜まっていた。きつと先輩だ！

「常えー（つね）練習メニユーは？」「フリー」『よっしや！！』と何人かが叫んだ。

「こいつら新入部員な」と林先輩は俺達を見て言った。俺達はまた頭を下げる。

「おおーこれで新入部員は8人か！今年は多いなー」「でも女子がいねえー！」と先輩と思われる人達は話している。（8人・・・？俺達の他に5人も？）と考えると昴が、「あ・・・中森さん！！」とデカイ声を出したのでみんな昴を見た。「あの覚えてますか？桐生です！」と背の高い人に向かって言った。「桐生・・・ああー三中中の？お前！！三木工に入ったのか！！」「はい！」と昴は嬉しそうに答えた。「中森こいつしつとん？」と一人の先輩が中森と言われる人に聞いた。「ああ、400m全中4位のやつだよ」と昴を見て言った。「まじかよ！全中4位！！??」「やばい！！まじかよ」と先輩達は騒いでる。

陸上部(後書き)

今回は短めです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655p/>

光るレーン

2010年12月14日18時02分発行